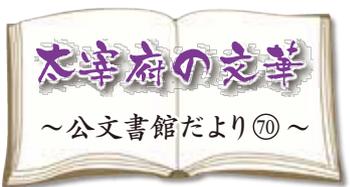


齋藤実の吉松訪問と「総督道」

大正14(1925)年12月9日、時の朝鮮総督である海軍大将・齋藤実が、3日後に吉松にやって来る、という一報が現地が届きます(『筑紫史談』第36輯)。朝鮮総督とは、当時の朝鮮統治機構のトップで、該地では行政権・立法権において強大な権限を持ち、時には国務大臣をしのぐ政治力を発揮しました。このたび東京から任地・朝鮮へ戻る道すがら、吉松に立ち寄ることになったのですが、齋藤は後には総理大臣も務める人物。当時戸数にして三十足らずのどこかなムラに、なぜそんな要人が訪れることになったのでしょうか。

齋藤来訪の前年7月、水城西門跡の近くに、「大陸山水城院」というお寺が誕生します。お寺といっても従来とは趣を異にし、「大陸発展・海外雄飛・大亜信交の道場」たることを目的とした施設で、高鍋日統たかかき にちとうという、日蓮の弟子・日持に憧れて大陸での布教活動を精力的に展開した、日蓮宗の僧侶が開いたものです。日統は水城跡を、白村江の戦いに敗れ後退した日本の負の歴史を象徴する悲壮な国防史跡と捉えており、第一次世界大戦後の日本の国防意識に警鐘を鳴らし、さらに大アジア主義思想を普及する拠点として、この地に水城院を建立したのです(『太宰府市史 通史編別編』)。齋藤の吉松訪問は、この水城院を目指したものでした。

兼ねてから交流があったらしい両



者、機を見て日統が齋藤を誘ったと思われませんが、来訪当日の12日には新聞社・九州日報と計って水城院で「水城史跡臨地講演会」を開催する周到さで、当日会場には数百名が押し寄せ、「窓外空地も立錐の地なき盛況」の中、県知事はじめ近隣出身の軍人や歴史家らが講演し、イベントを盛り上げました(『九州日報』)。

ところで、この齋藤総督来臨の栄誉に大いに慌てたのは地元吉松の人々と思われず。はじめにお話ししたとおり、来訪が当地に知らされたのはわずか3日前。青年会や有志者らは一致協力して、土地所有者の寄付にも助けられながら、総督の歩みを水城駅から水城院へつつがなく運ぶため、「汽車線路より西堤の北側に沿いて直ちに右折し、堤上に沿うて檣台(水城院の隣地)に達する」長さ約180メートル、幅約1.8メートルの新道を、たった2日で完成させ、これを「総督道」と命名して一行を迎えました(前掲『筑紫史談』)。

公文書館が所蔵する高原(日)家文書の中には、総督道と思しき、田地の間を一直線に走る整備した道の道を進める、齋藤一行の写真が遺されています。しかしはたしてこの道がどこなのか、現在の吉松の風景の中では、なかなか同定が難しくなっています。

公文書館 藤田 理子